

Ⅲ 連携協議会

2021年度（令和3年度）インクルーシブ・プログラム開発事業の推進にあたって、効果的な実施体制の構築、および関係部局・民間団体等との連携体制の構築を目的に連携協議会を設置し、年3回の会議を行ったので報告する。

令和3年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会

委員

氏名	所属等
川口 信雄 (会長)	(株) はまりハ 顧問
内野 智之	神奈川県立津久井養護学校 校長
太田 修二	相模原市教育委員会教育局生涯学習部 生涯学習課 課長
水野 正人	相模原市教育委員会教育局学校教育部 青少年相談センター 所長
米山 守	相模原市健康福祉局地域包括ケア推進部 高齢・障害者福祉課 課長
小泉 剛	社会福祉法人相模原市社会福祉事業団 課長
薬師丸 和浩	社会福祉法人風の谷第二やまびこ工房 研修研究課長
奥村 裕司	相模女子大学副学長 (多様な生涯学習のあり方検討WG 代表)
日戸 由刈	相模女子大学人間社会学部人間心理学科 教授 (多様な生涯学習のあり方検討サブWG メンバー)
狩野 晴子	相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授 (多様な生涯学習のあり方検討サブWG メンバー)
松崎 吉之助	相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科 准教授 (多様な生涯学習のあり方検討サブWG メンバー)
天野 徹	相模原市立療育センター陽光園 所長

事務局構成員

氏名	所属等
井上 敏治	相模原市発達障害支援センター 所長
小林 太郎	相模原市発達障害支援センター 主任
仁井田 正樹	相模原市発達障害支援センター 主任
村上 理	相模原市発達障害支援センター 主任
本橋 明彦	学校法人相模女子大学 学園事務部長 (多様な生涯学習のあり方検討サブWG メンバー)
有田 雅一	相模女子大学 夢をかなえるセンター部長 (多様な生涯学習のあり方検討サブWG メンバー)
斎藤 淳志	相模女子大学 大学事務部長

第1回 会議録

会議名		令和3年度 インクルーシブ・プログラム開発事業 第1回 連携協議会
開催日時		2021（令和3）年7月16日（金）15：00～17：00
開催場所		相模女子大学 会議室1
出席者	委員	10名：川口信雄氏、内野智之氏、太田修二氏、小泉 剛氏、薬師丸和浩氏、奥村裕司氏、日戸由刈氏、狩野晴子氏、松崎吉之助氏、天野徹氏、（欠席2名：水野正人氏、米山守氏）
	その他	
	事務局	6名：井上敏治、小林太郎、仁井田正樹、本橋明彦、齋藤淳志、有田雅一
議題等		1 挨拶 2 令和3年度 連携協議会について 3 議題 (1) インクルーシブ・プログラム開発事業について ア 事業概要 イ 本事業に至る経緯、及び意義について ウ 取り組み状況の報告 (2) 今後のスケジュールについて
議 事 の 要 旨		
<p>1 挨拶</p> <p>相模女子大学副学長 奥村裕司氏より挨拶がなされ、相模女子大学において「多様な生涯学習のあり方」について検討するための学長直属のワーキンググループが設置され、本事業はそのなかに位置づけられていることが説明された。</p> <p>相模原市立療育センター陽光園所長 天野徹氏より挨拶がなされ、本事業が相模原市の発達障害者・知的障害者に対する支援の充実・発展に寄与していくことが期待される事業であることが説明された。</p> <p>2 令和3年度 連携協議会について</p> <p>本協議会会長の選出について協議がなされ、委員より川口信雄氏が会長に推薦され、異議なく承認された。</p> <p>3 議題</p> <p>(1) インクルーシブ・プログラム開発事業について</p> <p>ア 事業概要</p> <p>事務局より、資料1に基づき説明がなされた。</p> <p>イ 本事業に至る経緯、及び意義について</p> <p>川口会長から資料2に基づき説明がなされた。</p> <p>ウ 取り組み状況の報告</p> <p>狩野委員、松崎委員から資料3に基づき説明がなされた。</p>		

【質疑応答】

内野委員：自分も特別支援学校の分教室を担当していたとき、生徒と一緒に東京学芸大学で交流授業を企画した経験がある。学校を卒業しても学びたいと思っている生徒たちのために、本事業を広げて行ってほしい。

太田委員：「大学のキャンパス」を活用するという発想がよいと思った。相模原市における生涯学習事業ともつながる話であると受け止めた。

薬師丸委員：川口氏の話と合わせて、大変興味深く聞いた。質問したいが、神戸大学での取り組みにおいては、「メンター」が重要な役割と考えられたが、相模女子大学のインクルーシブリサーチではどう考えるのか？

狩野委員：神戸大学に視察に行った当事者が、その取り組みを見てどう感じるかを聞き取ったうえで、考えていきたい。最初から、「支援する側・される側」という構造をつくりたくない。

薬師丸委員：大学の授業はアカデミックなので、当事者がついていくためにはサポートが必要ではないか。

日戸委員：2019年度に相模女子大学が主催する「さがみアカデミー」にてインクルーシブセミナーを開催した際、参加した知的障害の青年たちは、サポートがなかったにもかかわらず、小学校教員や特別支援教育専門の教員のわかりやすい講義よりも、大学教員によるアカデミックかつマニアックな授業の方が積極的に聴講していた、という経験があった。

小泉委員：インクルーシブリサーチのメンバーの選定方法は？

狩野委員：知的障害の青年たちは、前年度大学で実施したインクルーシブゼミのメンバー。学生は自分のゼミの学生に声をかけた。

日戸委員：昨年度のインクルーシブゼミのメンバーは、その前年度のさがみアカデミーの参加回数が多いメンバーから選定した。

小泉委員：インクルーシブゼミに参加したいと思う学生はどのくらいいるのか？

日戸委員：インクルーシブゼミは自分のゼミ生に声をかけているが、希望者が多いので、夏にボランティア活動をした学生を優先的に選ぶという形をとった。

小泉委員：感想になるが、今日の話はひとりの人間として感心して聞いていた。人間関係の大切さを感じた。

内野委員：昨年度のインクルーシブゼミ、今回のインクルーシブセミナー、いずれも学校を卒業した者を対象としているのはなぜか。学生は就職していないので、対等な立場とは言えないのではないか。また、本事業における相模原市の役割は？

川口委員：2019年度は「ゆたかカレッジ」という、福祉型カレッジの学生を対象とした。モデル事業のため、さまざまな対象で試行している。

事務局：文部科学省の「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」という委託事業を、相模原市の福祉部局が受託している。今後、事業を進めていく中で、教育部局等をはじめとして関係機関ともさらなる連携の強化を図り、相模原市として、市民に広報、還元を行い、その成果の普及や活用を図っていきたい。

(2) 今後のスケジュールについて

事務局より、資料4に基づき今後のスケジュールについて説明がなされ、第2回連携協議会（11月5日）、第3回連携協議会（1月21日）の日程について確認された。

以上

第2回 会議録

会議名	令和3年度 インクルーシブ・プログラム開発事業 第2回 連携協議会	
開催日時	2021（令和3）年11月5日（金）15：30～17：00	
開催場所	相模女子大学 会議室1	
出席者	委員	11名：川口信雄氏、内野智之氏、水野正人氏、米山守氏、小泉剛氏、薬師丸和浩氏、奥村裕司氏、日戸由刈氏、狩野晴子氏、松崎吉之助氏、天野徹氏、（欠席1名：太田修二氏）
	その他	
	事務局	6名：井上敏治、小林太郎、村上理、本橋明彦、齋藤淳志、有田雅一
議題等	議題 (1) インクルーシブ・セミナーの実施報告について (2) インクルーシブ・ゼミの実施報告について (3) インクルーシブ・リサーチの実施報告について (4) その他	
議 事 の 要 旨		
<p>議事に先立ち、川口会長より、配付された第1回連携協議会会議録の確認がなされた。</p> <p>1 議題</p> <p>冒頭で川口会長より、米国で作成された「知的障害の人たちに大学教育を」という5分間の映像が紹介され、わが国の現状と課題について解説がなされた。</p> <p>(1) インクルーシブ・セミナーの実施報告について 事務局より、資料2-1、2-2に基づき説明がなされた。</p> <p>(2) インクルーシブ・ゼミの実施報告について 日戸委員より、資料3に基づき説明がなされた。</p> <p>(3) インクルーシブ・リサーチの実施報告について 狩野委員、松崎委員より、資料4に基づき説明がなされた。また、資料5に基づき11月9日～11日に神戸大学、パンジー・メディア（社会福祉法人 創思会）等への視察を行う旨の報告がなされた。</p> <p>【質疑応答】</p> <p>内野委員：特別支援学校の分教室を担当していたとき、生徒と一緒に東京学芸大学で交流授業を企画した経験がある。学校を卒業しても学びたいと思っている生徒たちのために、本事業を広げてほしい。</p> <p>川口委員長：本プログラムは単位にこだわらず、学べるという点に意義がある。米国の大学の実践例のように、わが国の大学の門戸ももう少し広げてもらえるとよい。</p>		

奥村委員：報告を聞いて、ここから大学のプログラムとして、どう発展させられるかが課題となる。型にはまったものよりも、自由度の高いプログラムが良いように感じている。神戸大学でしっかりと視察をしてきたい。

薬師丸委員：どういう方向を目指すのだろうか、とっていた。神戸大学のようにするのか、今の形を大切にするのか。ポイントとして、支援する側とされる側、障害者と健常者という分け方をしないことを大切にしている。リサーチはずっと続くことであり、結論はないのだろうと思う。自分は支援者の立場であり、常に被支援者との間に壁を感じていた。本場のノーマライゼーションをつくっていくのであれば、支援する立場を壊していくことが大切であろうと感じている。

川口会長：ゼミなどで、最初は「勤労青年は理解できないのでは」という発言があったが、時間経過とともに、発言が変わっていく。リサーチに終わりはない、は重い言葉。

内野委員：ゼミの当事者とリサーチの当事者はイコールか？

川口会長：ゼミの当事者とリサーチの当事者は別。リサーチのメンバーは、昨年度のゼミの卒業生。今年のゼミにはメンターを入れており、それは昨年度のゼミを経験している学生。

内野委員：当事者が学び続けるための場が18歳までしかない、という点が日本の社会に足りない。知的好奇心をゆさぶる、学びたいという思いを満たす場として、充実させてほしい。3つのプログラムで進めているが、プログラムの位置づけを明確にするためにも、セミナーのコアターゲットをどこにするかを今後考えて欲しい。

川口委員：年配の人たちも参加しており、若者との両立の難しさを感じた。

小泉委員：セミナーやゼミの参加者は、互いの個人情報をごどの程度伝え合っているのか。
事務局：セミナーの後半では希望者が参加し、顔出しはあったが、基本的に情報開示はなし。ゼミは、自己開示のため、個人情報のやりとりは多い。

小泉委員：参加者の参加前のイメージと参加後のイメージの変化について、何かエピソードがあれば教えてほしい。

松崎委員：リサーチでは、始めは、自分たちがどういう趣旨で参加しているのかわかっていなかったが、だんだん「一緒にやることの意味」が理解されてきたような発言、「互いのことをもっとよく知りたい」という関心や感想が出てくるようになった。昼休みや帰りの場面など、積極的に交流しようとするようになった。「同じだった」という特徴的な意見も聞かれた。「若者として、同じような課題を抱えているんだ」「大学生も、同じことを不安に感じているんだ」という感想も聞かれるようになった。

小泉委員：こういう変化が今後の参考になるのでは。

川口会長：ゼミでは、ディープな趣味の開示をしあうことで、障害の有無を超えた発見と共感がみられるようになる。

水野委員：今回、初めて参加して、新鮮な思いで各発表を聞いた。冒頭の米国の動画も衝撃的だった。インクルーシブという言葉は抽象的だが、冒頭の米国大学の映像、ゼミの学生が話し合いで、「●●さん、良い提案ですね」と敬語で伝えるなど、相手の言葉を受け止めよう、敬意を払おうと思う態度等等、今日の話の中に具体的な「大事にしたいエッセンス」がたくさんあった。何よりもすごいと思ったのが、この仕組み。うまく機能していると思った。インクルーシブを実現するために、大事なことは仕掛け。支援・工夫が大切なのだろうと思った。こうした仕掛けにより、さまざまな得意・不得意を持つ人たちが共通の土台にのることができ、仕組みによって生まれた共感が、相互理解を生み、互いに学ぶ。最

最終的にインクルーシブな世の中が出来上がっていくのだろう。一方で、これが「サガジョ、すごいね」で終わってしまうのは、もったいない。普遍的に継続できるようエッセンスを整理し一般化できると良い。ターゲットの整理も必要で、別の障害には別の支援が必要かもしれないが、そこで必要なエッセンスは、今回の取り組みの中にあるのだろうと思った。

川口会長：これまでも、ひとりの教員を中心とした取り組みはあったが、大学として取り組むことで、当該教員がいなくなっても持続可能な取り組みになる。

米山委員：先日、障害者スポーツというテーマでほかの大学とインクルーシブな取り組みの打診があった。現状、コロナのため大学の中で他の学生と接する機会が少ないのかもしれないが、今後、若い人を中心に共生社会の実現を目指す取り組みを、ぜひ進めてほしい。対象人数が4人と限られているのは、最初の段階だからか。女子大学なので、男性がいないのは残念。他の大学と協力できるとよい。

川口会長：心がや柔らかい内に互いが触れ合う経験を通して、ナチュラルサポートができる街を目指すのが今回の取り組み。まず、学生に知ってもらうことが大切。

天野委員：コロナ禍にもかかわらず、工夫して、素晴らしい成果と感じている。大きなテーマに挑んでいる。市として、今後、何に注力し、どのような施策を展開していくかについては、非常に悩んでいる。役所も大きな責任を感じながら、みなさんの知恵を借りながら、やっていきたい。

川口会長：今年は川口がコーディネーターをしているが、将来的には、相模原市から複数のコーディネーターが出ることを期待している。それが一般化につながる

(4) その他

日戸委員：12月に開催される日本LD学会の自主シンポジウムにて、今年度の取り組み全体を発表する予定。企画・進行は日戸、発表者は小林・川口・狩野・松崎、指定討論者を文部科学省障害者学習支援推進室の鈴木孝志さんに依頼した。また、先日の発表収録時、鈴木さんから「本取り組みは、行政と大学の組織的な連携により、持続可能な運営体制を構築しており、共通の課題意識をもって協働を深めている点が素晴らしい。また、当事者主体のプログラムを通じて、周囲の学生や研究者にも気づきが生まれ、学びが連鎖している。交流や対話による”相互理解”が学びに大きく作用している。大学が地域社会と共存し、すべての地域住民にとっての生涯学習キャンパスとなるよう、今後の発展に期待。」との評価をいただいた。

今後のスケジュールについて

事務局：今後のスケジュールについて説明がなされ、第3回連携協議会を、2022年1月21日(金)15時30分から相模女子大学での開催を予定している。また、成果報告会は2月12日(土)の開催を予定しており、詳細については改めて委員各位に連絡する旨が述べられた。

以上

第3回 会議録

会議名		令和3年度 インクルーシブ・プログラム開発事業 第3回 連携協議会
開催日時		2022（令和4）年1月21日（金）15：30～17：00
開催場所		相模女子大学 会議室1
出席者	委員	12名：川口信雄氏、内野智之氏、水野正人氏、米山守氏、小泉 剛氏、薬師丸和浩氏、奥村裕司氏、日戸由刈氏、狩野晴子氏、松崎吉之助氏、天野徹氏、小中信幸氏（太田修二氏の代理出席）
	その他	
	事務局	6名：井上敏治、小林太郎、仁井田正樹、本橋明彦、齋藤淳志、有田雅一
議題等		<p>議題</p> <p>(1) 各取り組みにおける2021年度のまとめと課題</p> <p>(2) 報告会および報告書について</p> <p>(3) 今後に向けたディスカッション</p> <p>(4) その他</p>
議 事 の 要 旨		
<p>議事に先立ち、川口会長より、配付された第2回連携協議会会議録の確認がなされた。</p> <p>1 議題</p> <p>(1) 各取り組みにおける2021年度のまとめと課題 川口委員よりインクルーシブ・ゼミの実施状況、事務局よりインクルーシブ・セミナーの実施状況、松崎委員よりインクルーシブ・リサーチの実施状況（神戸大学、大阪パンジーメディアへの視察を含む）について、報告がなされた。</p> <p>(2) 報告会および報告書について 日戸委員より、2月12日に開催を予定している成果報告会について報告がなされた。併せて、本事業における報告書の制作状況について報告がなされた。</p> <p>(3) 今後に向けたディスカッション</p> <p>【質疑応答】 内野委員：インクルーシブ・セミナーは、各回申込みとのことだが、継続して参加した当事者はいたのか。 事務局：詳しいデータはないが、リピーターは一定割合みられた。（リピート参加状況の検証は重要として、検証を行うよう川口会長より要望がなされた）</p> <p>薬師丸委員：インクルーシブ・リサーチにおいて、学生と当事者がフラットになる「横の関係」が構築できたとのこと。自分自身、障害福祉の仕事をしていて、支援する側とされる側という「縦の関係性」になりがち。学生が横のつながりと意識するために、工夫しているこ</p>		

とを聞きたい。

松崎委員：リサーチで工夫をしたのは、一緒に話をする、一緒に作業をするなど、交流の時間を意図的につくったこと。当初、学生は当事者に対して「何かをしなれば」と思っていたが、一緒に活動するほど「同じ悩みをもっている」など、共通項に気付けるようになったように感じている。専門家として働きかけようと強く思う学生もいたが、勤労青年が積極的に自己開示し、学生の話聞いてくれたことがよかったし、互いがあだ名で呼びあうような関係性になった。交流の時間が十分にとれなかったとしたら難しかったと思う。

川口委員：学生と当事者が同年代という要素が大きい。障害者福祉は年齢層が広い。今回の対象はバブルを知らないZ世代の人で独特のメンタリティの強さを感じる世代だった。

薬師丸委員：同年代の共感、年齢差による関係性、というのはよくわかる。

川口委員：インクルーシブ・ゼミの中でも、支援者的な立場をとろうとする学生が出てきたときは、「それは結構です」と伝えた。

日戸委員：支援者や教員が、学生に対して何を期待しているのかをしっかりと伝えることが大切。

水野委員：「縦の関係」が悪いわけではなく、それは自然なことだし、必要なことでもあると思う。学校の中で、同世代が集まるクラスの中でも縦の関係は存在する。理解の早い子が理解の遅い子に教えるということは、よくあること。その場面だけ切り取ってみれば、縦の関係。そして、学校の中では場面が変われば関係性も変化する。縦の関係が繰り返されるうちに横の関係ができてくる、と考えている。本プログラムにおいても、ある場面を切り取ってみれば、縦の関係になっていたのだろう。しかしそれを繰り返すうちに、横の関係、信頼関係につながっていったのだと思う。

天野委員：学習意欲、知的好奇心、コミュニケーションを通じた人間形成、各側面でよい経験になり、今後も新たな成果が出てくるのでは。コミュニケーションを通じて、心の壁が融解していくプロセスを明らかにしてもらえると、市民に向けた啓発になると思う。来年度以降も、みなさんの力を借りて、この事業を発展させてもらいたいと願っている。

小泉委員：川口委員の説明にあった「楽しさ」という効果を良い話と思って聞いていた。障害の有無にかかわらず、同じ空間の中で分かち合うことが、人間の根本なんだと確認できた。今回の経験を活かして次に「何かをやっていききたい」と思う人がいたら教えてほしい。

狩野委員：勤労青年からは、軽度の知的障害者の強みと大変さを世間の人にもっとわかってもらうために発信していききたいという声があがっている。パンジーメディアでの視察に影響を受けた様子。他には、「お互いに理解したい」、「同じような悩みを持つ人の話を聞きたい」、という意見もあった。「ともに生きる」ということについて、今後も発信していききたい。

川口委員：「まだまだ学びたい。学ぶ楽しさを知ってしまった。」と言う青年もいる。

米山委員：「働いている人＝障害が治った」という認識からその群への支援が十分になされていない、という川口委員の問題提起に共感する。リサーチに参加する人たちが、参加によって生活が潤っている様子から今後も続けたいという気持ちがあるならば、OB会的なものをつくるなど、継続して参加できる仕組みがあると良いと思う。共生社会について、机上で考えず、若い人が自然とつきあうことで、関係性ができてくるのだろうと思った。

川口委員：神戸大学の場合は、NPO団体の利用者たちがプログラムに参加し、継続して学ぶ仕組みになっている。

小中委員：自分の担当は公民館。一部の公民館では、地域での交流を通じた仲間づくり、人間関係づくり等、障害者の学びの場づくりを行っているが、すべての公民館で実践するには仕組みや専門性が必要になると思う。どのような仕組み、専門性が必要なのか、知りたい。

松崎委員：自分は地域福祉を専門としているなかでは、なるべく地域の人たちが自ら活動ができるよう自主性、主体性を尊重している。ただし、放っておけば回っていくわけではないので、そこに専門家として関わる意義を感じている。その際、必要と感じるのは、時間軸を長めにとり、ゆっくり文化をつくっていくこと。急に変えようとしたら、周囲が何かを押し付けようとする、窮屈になってしまう。回を重ねるごとに、本人たちがやりたいと

思うことが自然と沸き起こってくるように、丁寧に進めている。時間やお金が限られているので、すぐの成果・結果を求めがちになるが、時間をかけて見守る姿勢が大切。

奥村委員：大学の代表の立場としては、今年度実践した事業を、本学としてどう発展させていくかが課題。第一のキーワードは「生涯学習」と考えるが、大学単体で継続的に取り組むのは難しく、みなさんの協力が必要。本学としては相模原市がやっているということが非常に大きく、相模原市に大学が協力するという構図になれば、この取り組みは更に広がっていくと思う。そのためにみなさんの協力が必要と感じている。自分としてのこの事業の発展形は、「インクルーシブ」という言葉が意識されなくらい「ともに学ぶ」ことが当たり前になるような学びの場がゴールになるのではないかと思う。

川口委員：自分は文部科学省の事業に関わって3年目。以前とは、大学側のバックアップ体制が強化されている。連携協議会に副学長、事務局の部長が出席され、関西への視察に副学長、部長が参加、リサーチには学長も参加している。これまで、大学におけるインクルーシブ・プログラムは、いち教員の使命感と努力に依存してきたが、この取り組みはそうではない。更に相模原市も連携協働している。今後、相模原市の中に地域としての受け皿の設置が課題。

本橋事務局長（大学事務局）：3年前から携わってたが、本事業は相模原でやることの意義が大きいと考えている。そして相模女子大学が地域にあって良かったと思ってもらいたいので、今後もいろいろな形でかかわっていききたいと思っている。

有田部長（大学事務局）：本事業に取り組んだなかでは、人員の不足や予算等の課題があった。その一方、具体的な課題が見えてくることによって乗り越えるべき点がよく見えてきた実りある1年だったと感じている。引き続き皆さまの協力を仰ぎながら進めたい。

斎藤部長（大学事務局）：関西の視察で印象に残ったこととして、神戸大学の津田先生より、資金の獲得に課題があると。最先端の取り組みであっても、それだけ大変なのかと思った。一方、その点をなんとかしていけば最先端になりえるのだと思った。今後も何ができるのかを探っていきたい。

内野委員：生涯学習を追求することの難しさはあるだろうが、大学での同世代の交流が基本なのかな、と思っている。プログラムの充実化も大事だが、手が回る規模というものも考えていかなければならない。長くかかわってきた人が卒業する、という発想も必要。循環させていかないと、持続可能性のあるプログラムにはならない。もちろんOBへの策も必要。

川口委員：LD学会での自主シンポジウムにおいて、行政がかかわっている取り組みという点で文部科学省から高い評価を得た。2年目、3年目になったとき、相模原市がどのようにかかわっていくのか。広報だけでいいのか。行政がもっている資源、学校教育や社会教育の中に、このプログラムを落とし込み、かかわりを持たせていく。例えば、小中学校の支援学級の先生に、この内容を研修として組み入れる等、行政としての工夫があれば、全国的に注目されるプログラムになると思った。とくに、最近は特別支援学級の進路指導がとても弱っているように思う。本プログラムは「豊かな人生を送る」がテーマなので、とてもよいと思う。

以上

2021年度の総括と今後の課題（連携協議会）

連携協議会 会長／株式会社 はまりハ 川口 信雄

新型コロナウイルスの感染が拡大し首都圏には、8月から9月にかけて緊急事態宣言が発出されたが、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」連携協議会は7月、11月、1月に相模女子大学において、すべて対面で実施するという僥倖に恵まれた。そこには対面ならではの活発な対話があり、たくさんの「発見」と「共感」が行き交った。今年度の連携協議会を総括するにあたり、協議の一部をふり返ってみよう。

「当事者が学び続ける場が18歳までしかない、という点が日本の社会に不足している。知的好奇心を揺さぶり学ぶ場として充実させてほしい」や「大学のキャンパスを活用するという発想がよい」等のご意見は本プログラムが目指すものを示唆してくれている。

一方、「参加対象者を学校卒業者にしているのはなぜか。大学生は就職していないので対等な立場とは言えないのではないか」「対象人数が4人に限られているのは、最初の段階だからか」「参加者のプログラム前後でのイメージの変化についてのエピソードを知りたい」等の疑問や要望は、実践を改めて振り返る機会を与えてくれた。

そして、「支援する側とされる側、障害者と健常者という分け方をしないことを大切にしている」「コロナ禍にもかかわらず、工夫して素晴らしい成果と感じている」「インクルーシブ・ゼミの学生の様子を見て、相手の言葉を受け止めよう、敬意を払う態度など大事にしたいエッセンスがたくさんあった」「インクルーシブを実現するために大事なことは仕掛けであり、支援・工夫が大切なのだろうと思った。こうした仕掛けにより、様々な得意・不得意を持つ人たちが共通の土台にのることができる」というように本プログラムの本質的な面でご評価をいただけたことは、大きな励ましとなった。

協議の中では、「これが『サガジョ、すごいね』で終わってしまうのはもったいない。内容を整理し一般化できるといい。別の障害には別の支援が必要かもしれないが、そこで必要なエッセンスは今回の取り組みの中にある」等の今後の課題も示された。

大学におけるインクルーシブな取り組みは、ともすると教官個人の善意や努力に依存するため、教官の異動によりフェードアウトする傾向もみられる。この点、相模女子大学における取り組みは、副学長と事務部長が連携協議会に参加し、神戸大学の視察にも同行する等大学側の全面的なバックアップ体制にその特徴がある。学長がプログラムの実施場面に立ち合い、文部科学省担当者と意見交換する機会もあった。また、相模原市と相模女子大学が連携・協働するという実践形態も持続可能性の点で大変重要である。

今後の方向性については「ここから大学のプログラムとして、どう発展させられるかが課題となる。型にはまったものよりも、自由度の高いプログラムが良いように感じている」という副学長の発言がその核心を端的に指摘している。

IV 市民への啓発

本事業の取り組みを広く市民に知ってもらうために、学会発表、セミナー企画などを行ったので報告する。

大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発 当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために

○日戸 由刈 1、○日戸 由刈 1、○小林 太郎 2、○川口 信雄 3、○武部 正明 4、○狩野 晴子 1、
○松崎 吉之助 1、鈴木 孝志 5

1. 相模女子大学人間社会学部、
2. 相模原市発達障害支援センター、
3. 株式会社はまりハ、
4. 東京学芸大学大学院、
5. 文部科学省障害者学習支援推進室

【企画趣旨】（日戸由刈）

このシンポジウムでは、行政と大学との連携・協働を通じた、発達障害や知的障害の若者に対する新たな生涯学習の場のあり方について検討を行う。一般に学校教育を修了した若者が地域の中で精神保健を維持しながら生活するためには、家庭および職場のほかに、コミュニティの核となる「とびきり居心地よい場所」の存在が不可欠である。しかし、発達障害や知的障害の若者の多くは、同世代の定型発達者と対等な仲間・友人関係を築くことが困難であり、自らこうした居場所に出向くことが出来ずにいる。

今回、相模原市において発達障害支援センターと相模女子大学の連携・協働により、発達障害や知的障害の若者を対象としたインクルーシブな生涯学習プログラム（「インクルーシブ・プログラム」）の開発を行った。行政の視点、当事者の視点、当事者と共に活動する学生・市民の視点という3つの視点から、期待される効果と課題について報告し、当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するための支援のあり方を検討する。なお本研究は相模女子大学の倫理審査委員会の承認を得た後、本人たちの同意を得て行っている。

【プログラム開発の実際】（小林太郎）

相模原市発達障害支援センターでは、これまでセンター単独で「仲間づくり」を目的としたグループ支援を行ってきた。しかし、センター内の支援だけでは発達障害や知的障害の若者が地域の中で同世代の定型発達者と交流する機会につなげることが難しい。そこで2020年度より大学との連携・協働により、地域における交流の機会拡充を図ることに重点を移した。具体的には、これまでの実績がある相模女子大学と共にインクルーシブ・ゼミ（以下、ゼミ）、インクルーシブ・セミナー（本学会にて2019年度に報告）の企画・運営を行い、2021年度は当事者のニーズ調査を目的に「インクルーシブ・リサーチ（以下、リサーチ）」を新たに開始した。なお、インクルーシブ・セミナーについては、ゼミやリサーチにつながる入口のプログラムと位置付け、これまで交流機会の少なかった者でも参加しやすいテーマや構成とした。これらの実践を足場にして、大学のノウハウや資源を活用し、センターの職員も共に参画しながら、当事者のニーズを踏まえたバリエーションの拡大を図り、プログラムの一体的な開発を行っている。行政の視点からは、本事業を通して福祉部局と教育部局のさらなる庁内連携を推進し、当事者や地域の声をつなげることで、地域における障害のある方の生涯学習や余暇の在り方について、福祉と教育、行政と民間団体等の垣根を超えた議論の展開を図りたい。報告では、プログラムの進捗状況および課題について述べる。

【インクルーシブ・ゼミの実際】（前半：川口信雄・後半：武部正明）

発表者の川口は、コーディネーターとして本ゼミの開発に関わっている。特別支援学校高等部や高等特別支援学校などをせつかく就職できても様々な問題に直面して心が折れ、立ち直れない卒業生が少なくない。働き続けるためには「困った時に相談できる相談力」が大切であり、そのためには「自分を知る」必要がある。そこで、ゼミでは「パーソナルポートフォリオ」作りを通して、自分を多面的に見つめることにした。自分を知ること、つまり「自己理解」は自分を見つめるだけでは深まりにくい。ゼミ仲間との対話の中から自分を発見することや自分のことを心を開いて語る経験に挑戦するように促した。報告では、高等特別支援学校を卒業して就労している知的障害や発達障害の青年4名と大学生4名による実践を報告する。前半は3つのゴール（①自分を知り自己理解を深めるためにパーソナルポートフォリオを制作する、②心を開いて自分について語ろうとする、③自分の悩みや困りごとについて相談し、お互いにアドバイスする）の達成状況を、事例を通じて点検する。後半は対象者の心理特性を紹介する。

【インクルーシブ・リサーチの実際】（狩野晴子）

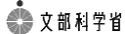
インクルーシブ・リサーチは、これまで調査の対象であった発達障害や知的障害のある若者が、調査の主体となり自らの生活を豊かにするために課題と感じている事柄について、大学生、大学教員等と協働して調査研究を行う活動である。その過程を通して、自身の関心を探求するための調査方法や社会への発信の方法を学び、セルフ・アドボカシーが可能になることをねらいとしている。2021年度は、前年度のゼミに参加した知的障害の若者4名と本学の学生を対象とし、「発達障害や知的障害の若者が大学に求めるニーズの探求」をテーマに、先駆的な実践を行う大学やNPO、教室等の視察や交流を行う。また、体験を通じてチームで意見をまとめ成果報告会等の場で発表し、独自の報告書等の制作を行う。参加者の反応や手ごたえ、課題について報告する。

【本プログラムの構造について；仮説と今後の課題】（松崎吉之助）

相模女子大学と相模原市が協働で開発する3つのサブプログラム（ゼミ・リサーチ・セミナー）は相互的な関係を考えている。すなわち、リサーチのメンバーはチームでまとめた意見をセミナーの参加者やゼミのメンバー、地域の教育関係者や福祉関係者、市民に向けて発信していく。またゼミのメンバーはセミナーにてピアサポート役を担う。そして、これらの活動や内容に興味関心を持った若者の中から、次年度の活動に参加し、ピアサポーターやニーズ調査の役割を担い、社会に向けて発信していく者を育てるといふ、「当事者による後進育成と啓発」の循環モデルを想定している。本プロジェクトの仮説は当事者が主体となり得られたリサーチの知見が、ゼミ、セミナーにも活かされることで、当事者主体のインクルーシブな社会の実現に向けた地域への発信や啓発、および発達障害や知的障害の若者と大学生や市民との交流や仲間づくりを日常的に促進するための持続可能な体制整備に寄与できるというものである。活動を通して、この仮説の検証に取り組んでいきたい。

キーワード：発達障害・知的障害、生涯学習、大学と行政の連携・協働

大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発 当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために【発表スライド】



障害者の生涯を通じた学習活動の充実に向けた取組について

現状と課題

【学校卒業後の状況】
特別支援学校卒業生の多くは就職又は障害福祉サービス（就労移行支援・就労継続支援）などに進む。

＜進路先データ＞
障害者雇用等による就職 30.1%
障害福祉サービス 60.3%
高等教育機関への進学率は約 2%

特別支援学校卒業生 約2万人

【地方公共団体の状況】

学校卒業後の障害者の生涯学習に関する組織がある地方公共団体の状況

都道府県	なし 94.3%	市区町村	なし 95.9%
------	----------	------	----------

組織を有する都道府県は5.7% 市区町村は4.1%

社会情勢の変化

平成26年 「障害者権利条約」批准
→ **障害者の生涯学習機会の確保が明記**

平成28年 「障害者差別解消法」施行
→ **国・地方公共団体の合理的配慮の義務化**

平成30年 障害者基本計画（第4次）及び第3期教育振興基本計画 策定
→ **基本的施策として「学校卒業後の障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実」を位置付け**

障害者は学校（特別支援学校等）を卒業した後の学びの場が少ない

「学校卒業後の学びや交流の場がなくなるのではないか」 当時の文部科学大臣（松野大臣）が特別支援学校訪問時に保護者から聞いた不安の声

推進体制の構築

国 平成29年4月、大臣メッセージ『特別支援教育の生涯学習化に向けて』を発出するとともに、総合教育政策局（当時の生涯学習政策局）に、障害者の生涯学習政策を総合的に推進する「**障害者学習支援推進室**」を新設。

地方公共団体 都道府県、市区町村に「**障害者学習支援担当**」窓口の設置を依頼。「障害者の生涯学習の推進方策について（通知）」令和元年7月発出。

推進方策の検討

学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議『**障害者の生涯学習の推進方策について（報告）**』（平成31年3月）

目指す社会のあり方
○誰もが、障害の有無にかかわらず**共に学び、生きる共生社会**の実現
○障害者の**主体的な学び**の重視、個性や得意分野を生かした社会参加の実現
各障害種の課題や対応、各主体の施策方針を明確化

主な取組（令和3年度）

地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築	都道府県を中心とした地域コンソーシアムを形成して体制整備 ※令和3年度は計4団体に委託
地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進	市区町村が民間団体等と連携して障害者の生涯学習機会を拡充 ※令和3年度は計18団体に委託
共に学び、生きる共生社会コンファレンス	学びの場の担い手の育成や学びの場の拡充等を目指して開催 ※令和3年度は全国8カ所で開催
「超福祉の学校」フォーラム	障害者本人等が参画する普及啓発フォーラムを開催 ※令和3年度は9月に「超福祉の学校」として開催
文部科学大臣表彰	障害者の生涯学習支援活動を行う個人・団体を表彰 ※令和3年度までに累計323件を表彰
人材育成の在り方検討会	社会教育、特別支援教育、障害者福祉等の分野で障害者の生涯学習を推進する人材育成等について検討
読書バリアフリー法に基づく取組の推進	令和2年度に基本計画を策定し、視覚障害者等の読書環境の整備を推進



地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究

(1) 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築〔43百万〕

➤ **都道府県と大学等との連携による体制整備・人材育成（R3年度：4箇所）**

- ◆ **都道府県（政令市）が中心となり、大学や特別支援学校、社会福祉法人、地元企業等が参画する障害者の生涯学習のための「地域コンソーシアム」を形成。**
- ◆ **学びの場の拡大に向けて市区町村職員向けの人材育成研修モデルを開発・実証。**

(1)都道府県レベルのネットワーク構築

(2)市区町村レベルの学習機会拡充

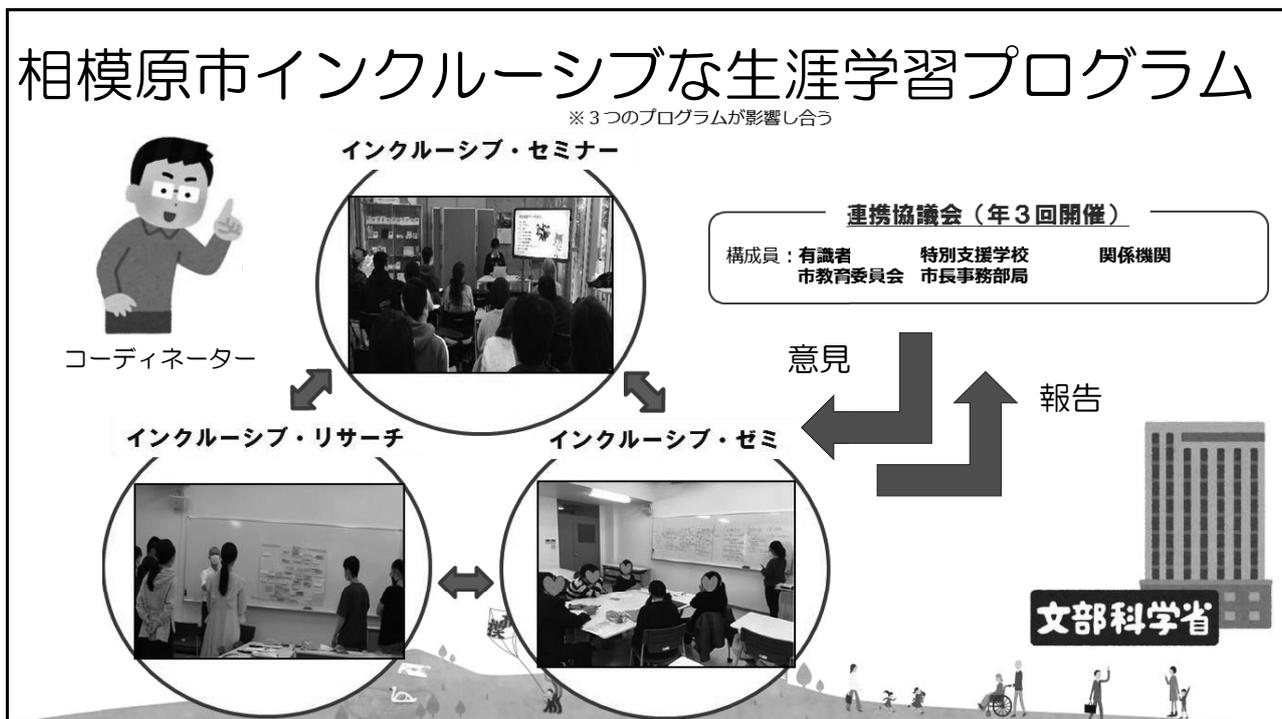
(2) 地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進〔38百万円〕※新規

➤ **市区町村による障害者を包摂する学習プログラムの開発（R3年度：18箇所）**

- ◆ **障害者の生涯学習のノウハウが乏しい市区町村が、実績のある民間団体等と組織的に連携し、主に公民館等の社会教育施設における、障害当事者のニーズや地域資源を踏まえた新たな「生涯学習プログラム」を開発・実施。その成果の普及・活用を目指す。**

※現状・課題：現在の取組の中心は民間団体を中心。
H30年度調査では、障害者の学びの支援経験のない公民館等は85%超

大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発
 当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために【発表スライド】



インクルーシブ・セミナーについて

概要

- ・ 特性に配慮された学びや交流の場の提供
- ・ 診断名ではなく、興味関心を基にした募集
- ・ 他のプログラム（ゼミ、リサーチ）や社会資源への架け橋

第1回 [講義] 学んでみよう！心理学 / [ピアサポート] 集まれ！音楽好きの人
相模女子大学人間心理学科 教授 森平 直子 氏（公認心理師・日本音楽療法学会会員）
「心理学と音楽」をテーマにお話いただけます。音楽は「心の健康」にどんな効果があるのでしょうか？！

1部 [講義] 14:00～15:00
 2部 [ピアサポート] 15:00～16:00 (参加自由)

年齢

福祉等利用

参加者24名（アンケート回答20名）

～アンケートより～

- ・ 二部構成なのがよかった。質の高い講義、なごやかな参加型の時間
- ・ 難しい言葉も使用されず、とてもわかりやすかったです。
- ・ 申込方法が知的障害の人にはやや難しい。 など

課題

- ・ 大学教員と当事者をつなぐ役割
- ・ 特性に配慮した申込方法

大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発
当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために【発表スライド】

インクルーシブゼミ (2021) の報告

インクルーシブゼミとは、相模女子大学のキャンパスで、特別支援学校などを卒業した青年と大学生が、同じ学生仲間という立場で参加するゼミで、テーマは「自己理解」です。そのツールが



「自己理解」は自分の好きなこと・得意なことが入口

ゼミは5回シリーズ

- ①ガイダンス・自己紹介
- ②好きなこと・得意なこと発表会
- ③わたしのトリセツ相談会①
- ④夢・なりたい職業発表会
- ⑤わたしのトリセツ相談会②

双方向の学び合いが醍醐味！

勤労青年

キャンパスでの対話がとても楽しい！
「ありのままでもいい」と気持ちが楽に

大学生

社会人になる不安が軽減しました
周りに助けを求めていいんだ！

わたしのトリセツ相談会

◎現在職場で困っていることや、将来困りそうなことについて相談する



氏名	相談内容	相談内容	相談内容
石川ひとと	仕事で困っている	気力や体力が衰えている	退職を考えている
佐藤あかり	仕事で困っている	仕事で困っている	仕事で困っている
佐藤あかり	仕事で困っている	仕事で困っている	仕事で困っている
佐藤あかり	仕事で困っている	仕事で困っている	仕事で困っている

Nobuo Kawaguchi

インクルーシブ・リサーチの実際

1. ミーティング・視察の様子

- ・ i-LDK(東京・練馬区) の視察 (8/22実施)



【障害概念の問い直し】
今の社会がいかに「健常者」「障害者」と位置付けているかを改めて痛感しました。
【話すこと・共有することの大切さ】
ゆっくりと話を聞く(あるいは伝えたいことを話す)ことが大切

- ・ 中間まとめ (10/9実施)

【みんなが行きたい大学】
・ 誰もが参加できる大学
・ 共に学ぶ機会があること
【よかったこと】
・ 多様な人との関わり
・ 学び (障害の固定概念が崩れた、共通点の発見等)



2. 活動から見えてきたもの

- ・ 両者が関わることによって生じる相互作用
- ・ 「知識や技能を得る学び」と「交流による学び」
- ・ 相互理解を深めるプロセスと信頼関係構築の重要性
- ・ 「誰もが参加できる大学」とは
 - ・ 交流や相互理解に基づくインクルージョンの実現
- ・ 当事者が視察を行う意義
 - ・ ロールモデルを見つけ、直接交流する機会を得る
 - ・ 外部からの刺激が権利意識の芽生え、障害概念の問い直し等を促進する

3. 課題

- ・ 障害当事者の参加を保障するための方策
- ・ 多様性への対応
- ・ インクルーシブ・リサーチのプログラム化

ライブ配信時の質疑応答参加者数：約 20 名（※登壇者を除く人数）

【ライブ参加者からの感想及び質問内容】

①発達障害等の有無にかかわらず、青年が聡明であるためには、広く多くの人、特に同世代の仲間の意見に耳を傾ける【傾聴】の取組みは不可欠ですね。良いご発表をありがとうございます。

（教育関係者）

②大変価値のある取組みをご紹介いただき、ありがとうございます。インクルーシブ・リサーチについて質問します。参加されている方はどのような実態の方でしょうか。リサーチのテーマは今後どのようなものを設定されるご予定でしょうか。今後の活動がどのように展開されるかが知りたいです。（ご所属不明）

③特別支援学校の校長を勤めておりますが、特別支援学校卒業後の支援がとても重要であると考えています。今回の各プログラム（セミナー、ゼミ、リサーチ）の成果について詳しく伺いたいです。（教育関係者）

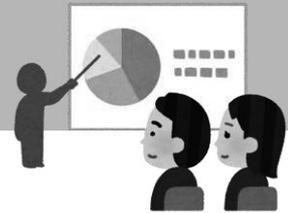
【まとめ】

現状ではライブでの参加者数が 20 名程度であることを踏まえると、特別支援学校卒業後の進路や当事者主体による支援のあり方の検討、ひいては障害のある方の成人期の生涯発達について、支援者同士でもまだその必要性や関心そのものが高いとは言えない状況であることが明らかとなった。だからこそ、地域の自治体及び文部科学省、大学が一体となって継続的に取り組み、世の中に発信していくことに意義があると考えていく。

知的障害者の生涯発達支援という点については、AAIDD（アメリカ知的障害・発達障害協会）の適応行動領域や WHO の ICF（国際生活機能分類）を参考に菅野（2021）が、「学ぶ・楽しむ（学習・余暇）」、「くらす（自立生活）」、「はたらく（作業・就労）」、「かかわる（コミュニケーション）」の 4 領域を見出している。本プログラムでは特に「学ぶ・楽しむ（学習・余暇）」について、自身のライフキャリアを形成する機会を高等教育機関として保障する取組みであると同時に、障害者と一般大学生とが共に集い、コミュニケーションを図ることで形成される対等なヨコのつながりとしての仲間関係を形成するという取組みであることを示したと考える。

障害者の生涯学習施策を推進する上で「共生社会の実現に向けた社会の側の変容を生み出す学習」の中でフォーマル性の高い教育とインフォーマル性の高い教育があり、特に後者は障害の有無を問わず多様な人たちの相互なで活発な活動を想起させるという点で重要であるとされている（津田，2019）。本取組では障害者と大学生がともに学ぶ側面がある一方、就労者と学生、あるいは成人期の男性と女性などといった属性のもとに高等教育という場で、お互いを理解し合うための交流というインフォーマルな機会を保障するものと解釈することができる。つまり、単に社会の側が障害者を受け入れるというよりもむしろ、成人初期の人たちが自身の QOL をより高めるために、自身のキャリア発達を考え、開示し合うことで相互理解を行う機会であり、結果的に多様性を認め合うための教育につながるという点は本取組の独自性であると考えている。この点については、プログラムを継続して効果検証を行いながら、今後様々な方と議論していきたい。

なお、本取組の啓発という点については、学会発表のみならず別の形でも行っていく必要があり、今後の課題である。



ともに学べる共生社会を、 相模原から

2021 年度より、相模原市と相模女子大学の連携・協働による発達障害や知的障害のある若者を対象としたインクルーシブな生涯学習プログラム（「インクルーシブ・プログラム」）の開発を行っています。この報告会では、当事者、学生、支援者、行政関係者などさまざまな視点から、1 年間の取り組みの成果を報告します。当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するための持続可能な支援のあり方について、みなさんと一緒に考えたいと思います。

プログラム

第 1 部 基調講演「障害のある人たちの生涯学習」

講師 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
教授 津田 英二 氏

第 2 部 実践報告（14：10～）

◆プログラムの概要と「インクルーシブ・セミナー」
相模原市発達障害支援センター 小林太郎 氏

◆「インクルーシブ・ゼミ」
（株）はまりハ 川口信雄 氏／参加した学生・青年

◆「インクルーシブ・リサーチ」
相模女子大学 狩野晴子 氏・松崎吉之助 氏／
参加した学生・青年

◆講 評
文部科学省障害者学習支援推進室
室長 清重 隆信 氏



日時 2022 年 2 月 12 日（土）

13:00～16:00（12：30 より入室可能）

方法：オンライン開催 先着 250 名まで

申込方法：相模女子大学ホームページ上の専用フォーム
（<https://forms.gle/8jawrThUxMuR4UHj9>）よりお申込み下さい。

申込期間：2022 年 1 月 13 日（木）～2 月 4 日（金）

※定員に達した時点で締め切らせていただきます。



専用フォーム
二次元バーコード

★ご案内★

当日 10:00～
インクルーシブ・セミナー特別編
でも、当事者たちが学びの
成果を発表します。詳しくは、さがまちカレッジの
ホームページからご確認ください。



インクルーシブ・セミナー第4回【特別編】

「私たちが考える！みんなが学びたいと思える大学とは？」予告

相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科 松崎吉之助

2021年度第4回インクルーシブ・セミナー（2022年2月12日開催予定）では、2021年度インクルーシブ・リサーチメンバーによる半年間の活動の報告を行う。2021年度インクルーシブ・リサーチでは「発達障害や知的障害のある若者が大学に求めるニーズの探求」をテーマに、発達障害や知的障害のある若者と相模女子大学学生を中心メンバーとして活動してきた。約半年間にわたり、メンバーで交流を深めながら、大学で障害のある若者と学生がともに学ぶためにどのような学びの仕組みがあればよいのか、どのような学びの形が良いのか…様々な場所に出かけ、ともに悩み、ともに議論を重ねてきた。

このチームが取り組んできたテーマは、簡単に結論が出るものではない。どのような講義等のプログラムがあればよいのか、どのような仕組みがあればよいのか、報告会の準備をしている1/8現在まだはっきりした答えは出ていない。ただ、ともに時間を過ごす中で、最初は緊張でお互いに話すこともできなかつたメンバーから「このメンバーで良かった」「このメンバーと一緒に学びたい」という声が多く聞かれるようになってきた。

障害がある若者と大学生がともに大学で学ぶためには、もちろん学ぶ内容や、学ぶ仕組みなどを検討する必要がある。しかし、学ぶ内容や仕組みだけではなく「誰と学ぶか」ということがとても大きな意味を持っている。このことに、半年間のインクルーシブ・リサーチの活動を通してメンバー一人一人が気付いたのではないかなと思う。

報告会の準備をしているメンバーたちの様子を見てみると、この人と一緒に学びたい、この人と一緒に学ぶから楽しい、この人と一緒だから学べるがあるという思いが伝わってくる。2/12の報告会では「発達障害や知的障害のある若者が大学に求めるニーズの探求」というテーマに対して、メンバーがどのような答えにたどり着いたのかぜひ発表を楽しみにしていただきたいと思う。また、インクルーシブ・リサーチメンバー間のチームワークやチームの雰囲気等にもぜひご注目してほしい。この半年間でメンバーが築き上げてきたお互いの関係性の中にこそ「発達障害や知的障害のある若者が大学に求めるニーズの探求」に対する答えのヒントがあるのではないかなと思う

さがまちカレッジ 特別講座
学ぶことは、面白い -暮らしの中の身近な学び-

2022年2月

相模原市発達障害支援センター共催

【さがまちwebカレッジ】

インクルーシブ・セミナー

いくつでも、誰でも、共に学びを楽しもう！
～若者も、高齢の人も、障害のある人も～

インクルーシブとは、さまざまな世代、さまざまな特性を持つ人たちが共に過ごすことを意味します。第1回から第3回までは、大学の講義である、「心理学」「経済学」「哲学」を、学び共通の興味を持つ仲間同士で交流してきました。

第4回は特別編として、このセミナーの原点である「インクルーシブな学びって何だろう」というテーマをみなさんと一緒に考えていきたいと思えます。このテーマを1年間深めてきた若者達と一緒に考えてみませんか？ご関心のある方は、ぜひご参加ください！

日 時 2月12日（土） 10:00～11:30
開催方法 ビデオ会議ツール「Zoom」を使ったオンライン開催
(ご受講にはインターネットに接続されたパソコン、タブレットなどが必要です)

内容・講師

第4回 特別編「私たちが考える！みんなが学びたいと思える大学とは？」
発達障害や知的障害のある若者と相模女子大学の大学生がともに1年間活動してきました（インクルーシブ・リサーチ）。今回は、1年間の活動報告を通して、インクルーシブな学びについて考えていきます。
・司会解説：相模女子大学人間心理学科 教授 白戸 由列 氏
・ファシリテーター：相模女子大学人間心理学科 准教授 狩野 晴子 氏

対 象 中学生以上の方（相模原市在住・在学・在勤の方優先）
定 員 20名（応募多数の場合は抽選）
参 加 費 なし
申込期限 2月00日（〇）必着
当日13時より
令和3年度インクルーシブ・プログラム
開発事業報告会開催！
(Zoomを使用したオンライン開催)
詳しくは相模原市ホームページをご覧ください。

さがまちwebカレッジとは…
ご自宅からインターネットで接続されたパソコン、タブレットなどを使い受講するオンライン講座です。
ビデオ会議ツール「Zoom」を使用したリアルタイムでの講義や「YouTube」を使用した動画配信で講義を行います。
(お申込み方法)

裏面の受講申込書に必要事項を記入のうえ、郵送またはFAX(042-703-8536)にてお申込みください。または、さがまちコンソーシアムホームページのさがまちカレッジ申し込みフォームに必要事項を入力して、送信してください。

お問い合わせ・お申込み先
公益社団法人相模原・町田大学地域コンソーシアム
さがまちコンソーシアム事務局 住所:〒252-0307 相模原市南区文京2-1-1相模女子大学内
TEL:042-747-9038 FAX:042-703-8536 E-mail:info@sagamachi.jp
ホームページ:https://sagamachi.jp/ お問い合わせ時間:月～金曜日(祝日を除く)9:00～12:00 13:00～17:00

第1回

困ったことを人に相談できるために

～ “セルフ・アドボカシー” の力を育む ～

【定員 250 名、先着順】

2022 年 2 月 19 日 (土) 13 時 30 分～15 時 30 分 (13 時 00 分～Zoom 入室可)

講 師：鳥居 深雪 (神戸大学大学院 人間発達環境学研究科)

司 会：狩野 晴子 (相模女子大学/子育て支援センター)

セルフ・アドボカシーとは「自分の権利を自分で守る」ことで、そのための主張性も必要になります。発達障害のある人たちが困りごとを人まかせにせず、自分で相談してサポートを受けられるようになるために、家庭や学校がすべきこと、してはいけないことについてお話しいたします。

申込方法：相模女子大学子育て支援センターホームページ上の専用フォーム

<https://forms.gle/2kzRczBYgvN3zVEN7> (スマートフォンは二次元バーコード利用可)

申込期間：2022 年 1 月 15 日 (土)～2 月 14 日 (月) ※定員に達した時点で締め切らせていただきます。

問合せ先：上記の専用フォーム または

相模女子大学子育て支援センターメール kosodateshien@mail2.sagami-wu.ac.jp

相模女子大学連携教育推進課 電話 042-813-5055

今年も、Zoom で
開催します

インターネット接続や Zoom の操作等に関するお問い合わせには対応できませんので、各自で使用方法等をご確認ください。



相模原市発達障害支援センター・相模女子大学子育て支援センター合同企画

共催：相模原市教育委員会

さがみはら発達障害連続 WEB セミナー2021

心豊かな生活が学校卒業後も続くために、今できること

参加費無料

4 月 2 日は「世界自閉症啓発デー」です。相模原市発達障害支援センターでは毎年、この日に向けて講演会を開催し、発達障害への理解促進を図っています

第2回 相模原市発達障害啓発講演会 【定員 250 名、先着順】

成人期に充実した毎日を過ごすために ～ “ライフスキル” を育み、生涯学び続ける ～

2022 年 3 月 12 日 (土) 13 時 30 分～15 時 30 分 (13 時 00 分～Zoom 入室可)

講 師：梅永 雄二 (早稲田大学教育・総合科学学術院)

司 会：日戸 由刈 (相模女子大学/子育て支援センター)

成人期に充実した毎日を過ごすためには、日常生活習慣を身につけることが重要です。また、学校卒業後は家と職場を往復するだけの生活になりやすく、活動範囲が狭まりやすいです。仕事以外でも興味関心や人間関係を広げ、充実した毎日を過ごすために必要な支援や、学齢期から準備できることについてお話しいたします。

申込み先：相模原市ホームページ電子申請システムよりお申し込みください。

https://dshinsei.e-kanagawa.lg.jp/141500-u/offer/offerList_detail.action?tempSeq=27315

(スマートフォンは二次元バーコード利用可)

申込期間：2022 年 1 月 15 日 (土)～2 月 28 日 (月) ※定員に達した時点で締め切らせていただきます。

問合せ先：相模原市発達障害支援センター

電話 042-756-8411 (直通) 月～金(祝日除く) 8 時 30 分～17 時

今年も、Zoom で
開催します

インターネット接続や Zoom の操作等に関するお問い合わせには対応できませんので、各自で使用方法等をご確認ください。



インクルーシブ・プログラムに関する講演・執筆・メディア掲載

講演

実施日	タイトル
2021年4月2日	港区発達支援講演会「発達障害の人たちにとっての、これからのライフスタイルを考える」(日戸由刈)
2021年6月8日	横浜市特別支援教育総合センター教職員研修講座「大学でのインクルーシブな学び」(日戸由刈)
2021年7月19日	弘前大学大学院講義「知的障害・発達障害青年のための大学教育」(川口信雄)
2021年11月22日	広島県個別最適な学びの実現に向けた教職員等研修「幸せに生きるための力を育む」(日戸由刈)
2022年1月22日	相模原市立療育センターライフスキル講座「将来を見据えて今、大切にしたいこと」(川口信雄)
2022年1月26日	東京学芸大学附属特別支援学校・令和3年度研究協議会「知的障害の人たちの青年期以降のライフスタイルを考える：インクルーシブな生涯学習を目指して」(日戸由刈)
2022年2月15日	天理大学・学校卒業後の学びの場を考える交流会「相模原市におけるインクルーシブ・プログラムの紹介」(狩野晴子・小林太郎・インクルーシブリサーチのメンバー)

執筆

発行日	タイトル
2021年9月1日	特別支援教育研究 2021年9月号(東洋館出版社)「大学生と知的障害の青年によるインクルーシブ・ゼミ」(川口信雄)
未定 (2022年度上半)	おとなの自閉スペクトラム[MOOK]:メンタルヘルスケアガイド(金剛出版)「社会参加のケア:5-余暇活動支援」(日戸由刈・印刷中)
2022年7月予定	臨床発達心理実践研究第17巻特集「知的障害の青年と学生を対象としたインクルーシブ・ゼミの実践:コロナ禍によって生じた変化および課題(仮)」(日戸由刈・執筆中)

メディア掲載

発行日	タイトル
2021年9月9日	共生社会実現へ実践研究(タウンニュースさがみはら南区版)
2021年9月16日	障害者の学びの場を拡充(タウンニュースさがみはら中央区版)
2021年9月25日	共生社会へ障害者と共に学ぼう(朝日新聞)
2022年1月15日	「共に生き、学べる社会」づくり(広報さがみはら)

2022年1月15日現在

あしがき

■本事業の始まりをふり返ると、川口先生、日戸先生、狩野先生、松崎先生はじめ、庁内、大学内の皆様と多くの議論を重ねて企画を詰めてきた日々が思い起こされます。企画内容について、様々な角度から意見が交わされながらも、共に学び、生きることができる社会を目指したいという思いは、立場は違っても企画に携わる方々全員が自然と一致していたように感じます。そして、この思いは、企画段階から一貫して本事業の重要なテーマになっています。本事業開始後は、各プログラムの活動を通じて参加者も一緒になり、インクルーシブということについて思いを巡らせるようになっていました。本事業について、日戸先生からは「痛ましい事件が起こった、この相模原市からインクルーシブな取り組みに挑戦していくことは、大変意義がある」、神戸大学の津田先生からは「インクルーシブであることが、イノベーションを起こしていく」とお言葉をいただきました。私自身、誰一人取り残さない社会が新たな価値を生み出していくと信じております。

本事業に当たりまして、全体にわたりコーディネートしていただいた川口先生はじめ、ご協力いただいた参加者の皆様、相模女子大学の皆様、連携協議会の皆様、視察を受け入れてくださった皆様、関係していただいた全ての皆様に心から感謝いたします。本事業は最先端の研究課題です。インクルーシブとは、ただ混ぜてしまえばいいということではありません。これまでの生き方や背景が異なる様々な人々がともに過ごすためには、戦略的なコミュニティ作りが大切です。

引き続き、みなさまのご指導をいただきながらともにすすめてまいりたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願ひします。(相模原市発達障害支援センター 小林太郎)

■本プログラムの前段階を子育て支援センター事業「インクルーシブ教室」として立ち上げたのが2019年度。横浜わかば学園を退職したばかりの川口信雄氏の熱意に押された形でスタートしました。1年半後、当時本学の学事企画課担当であった本橋明彦氏から「意義のある取り組みだから、ぜひ発展させましょう」と励まされ、文部科学省障害者学習支援推進室の井口啓太郎氏からも何度も背中を押していただき、次のステップに踏み込むことになりました。そして、日頃から相模原市発達障害地域連絡協議会や「さがみはら発達障害連続セミナー」などで活動を共にしてきた相模原市発達障害支援センターの小林太郎氏、本学人間社会学部で福祉領域を専門とされる狩野晴子氏や松崎吉之助氏が「やってみよう」と立ち上がってくださったおかげで、素晴らしいチームによる実践が実現しました。とくに、インクルーシブリサーチにおける徹底した当事者主体の考え方や、その活動でみられた学生・青年たちの内面の変化は、従来型の教育者や支援者に対して「発想の転換」を促すものであり、私自身も大変勉強になりました。さまざまな実践をもとにした「大学での学びとは、決して学問的な知識や技能の獲得だけを指すのではなく、多様な他者との交流によって得られる学びを保障することが最も大切である」という考え方は川口氏・狩野氏が共通して述べており、本プログラムのコア・バリューになるだろうと確信しております。

今回、ご多忙なところを快く視察を受けてくださった神戸大学の津田英二先生、大阪パンジーメディアのみなさまに心から感謝いたします。また、本事業報告書の作成にあたっては、夢をかなえるセンターの有田雅一氏に大変お世話になりました。有田さんと小林さんがいなかったら、本プログラムは回っていなかったと思います。そのほか、本プログラムに関わりをもってくださった沢山の方々に、心から感謝いたします。(相模女子大学 日戸由刈)

令和3年度（2021年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—

2022年2月発行

相模原市発達障害支援センター

〒252-0226 神奈川県相模原市中央区陽光台3-19-2 TEL 042-756-8411

相模女子大学

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号 TEL 042-742-1411（代）